

(1) 生徒の実態

本実践の対象生徒（以下生徒A）は、以下本校中学部に在籍する3年生の生徒である。本校は知的障がいのある児童生徒が通う特別支援学校である。生徒Aはかん黙があり、学校および家庭では身振り（うなずき、首ふり等）によってコミュニケーションをとっている。実年齢に対する発達に遅れは見られるが、日常的なコミュニケーション、感情表現に関する内言語は十分に育っているものと考えられる。こちらからの問いかけには身振り等で答えることができるが、自分からはたらしかけは少ない。授業における作文などの課題ではできごとを簡単な文章にすることもできるが、気持ちや感想となると書くのが難しい生徒である。

(2)

そこで、3年進級時からタブレット端末、ホワイトボードによるコミュニケーションの機会を意図的に作り、感情表現や自主的なたらしかけを引きだせるよう支援を行ってきた。例をあげれば、毎日の帰りの会で一日の振り返りを行ったり、保健室や給食室に行く際に用件を1人で伝えたりする活動を行ってきた。発語によるコミュニケーションの可能性を模索しつつ、生徒Aの心理的負担となりすぎないように考慮して、代替手段によるコミュニケーション支援を行ってきた。

ホワイトボード等の筆談によるコミュニケーションは十分習得できてきていたが、将来を見据えた時ICT機器を活用できるようになることでコミュニケーション手段の選択肢を増やし、それが生活の幅を広げることにつながるのではないかと考えこの実践を行った。ただ、本校のICT環境を考えるとタブレットを常時1人の生徒に貸し出し続けることはできなかったため、学校生活の中ではホワイトボードとタブレット端末の併用という形で支援を行ってきた。

生徒Aは中学部卒業年度であったことから卒業式での「別れの言葉」をこれまでの学習と中学部生活の集大成と位置づけ本実践を行った。本校卒業式では卒業生は「別れの言葉」という形で学校生活の思い出を1人一言ずつ言うのが慣例である。色々な実態の生徒がそれぞれの実態に応じた形で「一言」を表現するのだが、生徒Aには事前に準備したプラカード等を見せる形ではなく、その場で、音声言語で表現してもらいたいと考え日々の支援を行い、本実践につなげた。また、「卒業式」という学校生活最後の行事で日々の学習成果を発表することでこれまでの取り組みに自信を持ち、進学して行って欲しいとの願いから本実践を行った。

(2)

本実践の流れは次の通りである。

0、学校生活の中でタブレットやホワイトボードによるコミュニケーションを行う。

- ① クラスが担当する「別れの言葉」のパート「休み時間」の思ひ出をクラス活動の中で出しあう
- ② 自分の言う台詞を決める
- ③ 発表方法を自分で決める（声、タブレット、ホワイトボード、画用紙など）
- ④ 発表の練習を行う。
- ⑤ 本番

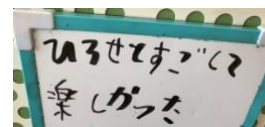
生徒Aはすぐに自分が先生にいたずらをしていたことを思い出し、タブレット端末に文字入力を行い発表した。そこから、担任と相談して自分の言いたい台詞を決定することができた。そして、発表形式も前述の選択肢からすぐに「タブレット」を選択することができた。読み上げアプリについては、いくつかの候補を試した後、本人が最も使いやすかった「棒読み」というアプリを選択した。本人はローマ字入力よりもフリック入力が標準になっており、読み上げ速度や声質を自由に選べる点が気に入ったよう

であった。練習では皆の台詞の流れに乗って発表できるよう、自分の入力速度・読み上げ速度なども考慮して調整を行うことができ、機器を使いこなすことができている様子であった。また、自身の声ではないものの、皆と同じ音声言語で参加できていることに満足し自信を持つことができた様子であった。今回の実践では「卒業式」の「別れの言葉」と場面を絞って報告を行っているが、本実践に至るまでに日々の学校生活の中で意図的にコミュニケーション場面を設定し、ICT機器を含めた代替手段を用いたコミュニケーションを行うようにしてきたことが重要であると考えられる。コミュニケーション手段の獲得および定着、深化には時間がかかり単一の授業や単元で成し遂げられるものではない。そこで重要になるのが「伝わった」「自分にもできた」「これならできる」という経験と自信の積み重ねであると考え本実践を行った。その意味で参列者も多く式典と言う緊張感もある「卒業式」での成功は本生徒Aにとって大きな自信となったものと考えられる。

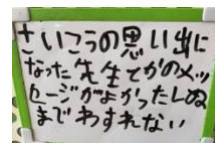
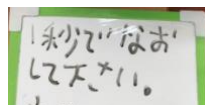
また、本実践ではかん黙傾向という課題に焦点を当てたが、それ以外にも人前での発表や発語によるコミュニケーションを苦手とする児童生徒は校種や学齢に関わらず一定数存在する。それら児童生徒にとっても本実践のような取り組みは応用可能であろう。実践の目的はあくまでコミュニケーション手段の選択肢の増加とそれに伴う内容の深化である。その目的を考えれば手段は必ずしも自分の声によるものに限定する必要は無い。手段がそれぞれの児童生徒に応じたものであれば良いと考えている。ただ、タブレットの活用は手段の1つであるが、これからの社会を生きる子ども達にとっては重要な選択肢となりうると考えている。将来、コミュニケーションが必要な場面に備えホワイトボードや紙束を持ち歩くのか、スマートフォンを含むタブレット端末を持ち歩くのかどちらがその児童生徒にとって良い選択となりうるかを本人も含めて考えていく必要がある。本実践の生徒Aの実態と将来を検討した時、筆者はタブレット端末が妥当であろうと考え本実践を行った。

(3) 実践の成果 (子どもたちや教員はどう変わったか、絆の深まりは見られたか等)

毎日の帰りの会の中での振り返りでは、進級当初は出来事のみを文字にし、気持ちは担任の出す選択肢から選ぶことが多かったが、少しずつ感情を踏まえて文章化できるようになって行った。



そして、好きな教員が病気で休んだ際には自らメッセージを書き伝えて欲しいと担任に申し出ることができた。さらに、卒業直前のお楽しみ会で教員が生徒に歌を贈った日には今までで最も長く感情表現が最も豊かな振り返りを書くことができた。



また、隣のクラスや保健室、給食室に用事をお願いした際にもタブレットやホワイトボードを持って用事を伝え用事を遂行することができそれも自信につながったものと考えられる。これらの積み重ねが卒業式の「別れの言葉」につながったものと考えている。この経験を卒後も活かして行ってくれるものと信じている。ICTと言う代替手段を存分に活用することでコミュニケーションの方法の選択肢を増やし、コミュニケーションの可能性を広げ、自信をつけたことで、感情表現を引き出すことができたと考えている。